〈資料紹介〉

函館市中央図書館蔵・雑誌『台湾愛国婦人』目録

― 明治四十五年一月並びに大正三年刊行分 ―

下岡友加

『台湾愛国婦人』は、明治四十一年十月から大正五年三月に渡り、愛国婦人会台湾支部が発行した、全八十八冊の機関誌である。

当雑誌が、戦死者の遺族や傷痍軍人の救護・慰問を目的とする愛国婦人会の趣旨を広め、特に台湾総督府の「山地討伐事業」を援助するためのプロパガンダとして機能していたことについては、既に別稿で指摘した通りである。[1] 国内の愛国婦人会の機関紙（誌）『愛国婦人』（明35・3～昭17・2）が、発刊当初からしばらく新聞の形態を取っていた（大正九年より雑誌となる）のに比して、それより早く『台湾愛国婦人』は雑誌として刊行された。また、明治四十四年以降は常に二百～三百頁の紙面が保たれ、年間最大八万六千百七十五部（大正三年）が台湾島内に配布されていたことにも、この雑誌に課された役割の大きさは知れる。[2]

台湾統治初期における政策履行の広告塔としての役割を担っていた『台湾愛国婦人』は、総督府の威信をかけて、当代一流とされた著名な文化人・作家の原稿を数多く掲載している点でも注目される。当雑誌掲載作品は、各人の著作全集に未収録であったり、著作年譜から漏れているものも多く、その一部は、上田正行「資料『台湾愛国婦人』文芸関係主要記事」[3]が明らかにしているものの、明治末から大正初期の文化・文学研究における、未だ手つかずの資料庫であると言えよう。

本稿はこうした雑誌の資料的価値を考慮し、国立中央図書館台湾分館（台湾・中和市）所蔵の目録（第七十四～第八十八巻）、及び第六十巻の目録を掲げた別稿[4]に引き続き、函館市中央図書館の所蔵の第三十八巻（明治四十五年一月刊行）、並びに第六十二巻～七十三巻（大正三年一月～十二月刊行）を目録として紹介するものである。なお、同図書館は『台湾愛国婦人』の他巻も所蔵しているが、ここでは他の場所で確認されていない新資料のみの紹介に限定した。今回の発見により、雑誌全八十八冊のうち、四十八冊の所在が明らかになったことになる。

凡例

一　漢字は新字体に改めた。

二　目次と本文に相違がある場合、明らかな誤植を除いて、本文の表記（掲載順）に従った。また、同一人物名の表記が巻によって異なる場合があるが、特に統一はせず、本文のまま翻刻し、肩書

きは省略した。

三　原則毎巻に掲げられている「愛国婦人会台湾支部報」「読者文芸」「新刊紹介（寄贈書目）」「懸賞募集発表」「次巻予告」欄、別に目次が設定されている漢文欄は、紙面の都合上、省略した。

第三十八巻（明治四十五年一月）

愛国婦人会会歌　田中正平
植民地と音楽　小此木まつ
正月の思ひ出　伊藤左千夫
梅の古歌　二木謙三
腹式呼吸に就て　今関天彭
英国皇后陛下の御事ども　加納幽閑子
枋橋ゆき　江木栄子
十二月花神議　松平直敬
松の声　加納幽閑子
淡水戯館の一夜　福迫歌橋
弓の話　三宅花圃　長谷川時雨
家庭と文芸　在京記者
国木田治子女史を訪ふ　城北子
百人一首歌留多早取秘法　黒川義太郎
動物園雑話　つね子
新春の流行　薔薇生　匿名生
家庭と園芸　小林夫人信子
正月重詰献立　正月料理　松翠
北蕃　森丙牛

文芸

小説　福の神　常夏子
小説　荒寥の心　榎本れん子
小説　モデル　岡本かの子
支那小説　合影楼　今関天彭
笑門福来　三宅花圃
短歌選抄　伊藤左千夫

お伽草紙

雪の峯（お伽小説）　ゆかり子
雪だるま（お伽小説）　はながたみ
ばんざい（人形劇）　レーン夫人作・ゆき麿
七福神（落語）　三遊亭梅朝

附録小説

芍薬　与謝野晶子
平和　国木田治子
お蝶　水野仙子

第六十二巻（大正三年一月）

予が日本婦人観　尺秀三郎
虎のおもちゃ　杉浦非水
生物学上より見たる生活問題　丘浅次郎
虎に関する迷信　淵泉漁郎

諸国伝説　広堂
正月の思ひ出
華やかな思ひ出　泉鏡花
餅搗と帳附　三宅花圃
七日の鬼火　本田穆堂
江戸時代の正月　梶田半古
過渡期の正月　中村不折
嬉しみと悲しみ　池田蕉園
京都の吉田村　佐々醒雪
倫敦まで　XYZ
跡見先生　三宅花圃
現代若き女流の和歌　青花生
新年の家庭　福迫佳橋
南蕃　森丙牛

文芸
正月まへ（小説）　与謝野晶子
鳥笛（脚本）　泉鏡花
紫陽花の窓（小説）　徳田秋声
杜麗娘伝（支那小説）　今関天彭
希望の光（お伽噺）　小野小峡子
炭娘（お伽噺）　花筐山人
旅中　井上三郎
小品二種　西川芳子
竹囲詞壇詠草

屠蘇機嫌　坪谷水哉
落語
台湾水中の黄金　蔡々斉柏葉
富貴天にあり　柳家小三治

第六十三巻（大正三年二月）
醒めたる婦人　宮川経輝
実行的奉仕　河合道子
母親のために　武内貞義
美術の印象　伊藤忠太　杉渓六橋　石井柏亭　乙竹岩造　樋畑雪湖　竹久夢二　黒板勝美　細川潤次郎　鷹田其石　田中頼章　三宅花圃

萩の舎中島歌子刀自　夕影生
津田梅子女史を訪ふ　みち子
お人形さんの病院
本誌に対する諸名家の感想

家庭
茶の湯独習　星野宗悦
花の栞　此君庵耕斉

蕃界
南蕃　森丙牛

文芸

或る男の話　藤村
波の戯れ　徳田秋声
飛行機上の怪美人　押川春浪
幼きころ　尾島菊子
歌　原田琴子　森花葉　西川芳子
短歌選抄　土屋榛南
俳句評釈　竹美
講談落語
春日局　蔡々斉柏葉
乃木大将閣下正伝　渡辺政徳
二十四孝　二葉亭有楽

第六十四巻（大正三年三月）

家庭の人となりたる婦人に読書を勧む　安井哲子
学校に於ける悪教育　西山悊治
婦人問題は如何にして解決さるゝ歟　上杉慎吉
ユージェニックス　一記者
「じやがたら文」に現はれたる日本婦人気質　鬱金香
ロンドンにて　XYZ
諸国伝説　太田たま子
諸国珍味五十種　真山青果
家庭
茶の湯独習　星野宗悦
花の栞　此君庵耕斉

文芸
波の戯れ　徳田秋声
永遠の子　無名氏
幼きころ　尾島菊子
桃花扇物語　今関天彭
乙女の国　西川芳子
短歌選抄　土屋榛南
閨秀俳句　桃葉
講談落語
春日局　蔡々斉柏葉
乃木大将閣下正伝　渡辺政徳
錦嚢　二葉亭有楽

第六十五巻（大正三年四月）

現代の婦人に望む　芳賀矢一
母親のために　武内貞義
花の印象
日本趣味に投じたる花　丸山晩霞
花壇の思ひ出　窪田空穂
珍しい梅の画　尾形月耕
花の興味　梶田半古
諸国伝説
英国の結婚式　金木生訳
朝鮮風俗　痩形鱒髭

不思議の知りたき心　南斗星
応接間の名流婦人　夕影生
養蚕と婦人　武藤金吉
諸国珍味五十種　青果
家庭
子供の寄生虫の療法　加藤照麿
茶の湯独習　星野宗悦
花の栞　此君庵耕斉
代々木より　佳橋
文芸
蠍　真山青果
くり返す春　原田琴子
小曲数篇　よさのひろし訳
短歌選抄　土屋生
俳句評釈　菜の里人
講談落語
春日局　蓁々斉柏葉
乃木大将閣下正伝　渡辺政徳
世辞屋　二葉亭有楽

第六十六巻（大正三年五月）
爾の年齢を数ふる勿れ　一記者
婦人は声を美しくせよ　金杉英五郎
誤れる新しき女　太田三次郎
名物の印象　芳賀矢一　塚原渋柿園　饗庭篁村　思案外史　佐々醒雪　角田浩々歌客　目賀田夫人　生田長江　三宅花圃　黒板勝美　与謝野寛
女に関する語原　夕影
応接室の名流婦人　金田万次郎
精神作用の肉体に及ぼす感応　三宅花圃
五月幟り　松岡曙村
芸術座の「海の夫人」　都の女
流行界の趨勢　星野宗悦
茶の湯独習　此君庵耕斉
花の栞
文芸
白鳩　国木田治子
小曲三篇　よさのひろし
幼きころ　尾島菊子
桃花扇物語　今関天彭
短歌選抄　土屋榛南
徂春の譜　西川芳子
竹囲詞壇詠草　竹下梅子
東京より　一記者
講談落語
春日局　蓁々斉柏葉

口癖　二葉亭有楽
附録　新訳栄華物語　与謝野晶子

第六十七巻（大正三年六月）
皇太后宮を悲み奉りて　与謝野晶子
嗚呼桐の玉葉　嵯峨野
皇太后陛下の御事ども
御和歌の御堪能　阪正臣
美術の御嗜み　前田健次郎
女子教育に御心を注がせ給ふ　細川潤次郎
陛下と赤十字社　小澤武雄
歴代中の明皇后　土方久元
奉悼　土屋文明
皇太后陛下の御文藻　鳴鳳
桐の下露　一記者
奉悼　胡桃沢勘
乃木大将夫妻の最後　一記者
西洋画の懸け方に就て　石川欽一郎
母親のために　武内貞義
夏の色　たま子
家庭
茶の湯独習　星野宗悦
夏の粧ひ
花の栞　此君庵耕斉
六月の惣菜料理
文芸
風　佐藤紅緑
行く春　与謝野晶子
幼きころ　尾島菊子
双珠物語　今関天彭
短歌選抄　土屋榛南
女流俳句評釈　菜の里人
お伽小説生蕃退治　禅湖山人
竹囲詞壇詠草　桐廼舎詠草
代々木より　若葉
講談　春日局　蓁々斉柏葉
新訳栄華物語補遺
奉悼皇太后陛下　斉藤茂吉　島木赤彦

第六十八巻（大正三年七月）
総裁閑院宮智恵子殿下本誌を御観賞遊ばさる　一記者
家庭と規律　石川半山
生活の独立を心がけよ　山路愛山
結婚後にも生活の独立　安部磯雄
看板に偽あり　湯原元一
女流俳人逸話　源氏楼主人
幼年時に於ける我が先生　平福百穂　長谷川時雨
小杉未醒　後藤宙外

育児の注意　五姓田芳柳
近縁結婚の副産物　星影女
賢婦人伝　小西信人
茶の湯独習　星野節堂
花の栞　星野宗悦
夏期病人の食物　此君庵耕斉
最新式髪の結ひ方と手入法　一記者
見たり聞いたり　一記者
文芸
蕃社の悲劇　押川春浪
小曲二篇　よさのひろし
幼きころ　尾島菊子
うつゝのこゝろ　西川芳子
父の死　太田広堂
慰問袋　たま子
短歌選抄　土屋文明
閨秀俳句　菜の里人
恐ろしかりし旅の一夜　重松淑子
講談　春日局（完結）　蓁々斉柏葉
附録　太魯閣蕃討伐記

第六十九巻（大正三年八月）

賢婦人たる要素　前田慧雲
生存競争と教育　丘浅次郎
誰にも見せぬ手帳　白栄野人
変態婦人論　秋山潮風
米国婦人の内と外　新帰朝者
母親のために　武内貞義
賢婦人伝　星野節堂
真珠の話　一記者
浴衣と海水浴
夏期に於ける皮膚の手当
茶の湯独習　星野宗悦
花の栞　此君庵耕斉
丹波栗の話　中岡朝一
文芸
操　国木田治子
王昭君　嵯峨野
鳥羽の恋塚　茶目丸
いたち　西川よし子
短歌選抄　土屋榛南
女流俳句評釈　菜の里人
十里髯の一寸法師　花筐山人
長嶺氏射初式
講談　山鹿素行　雲井芙蓉
附録　太魯閣蕃討伐記

第七十巻（大正三年九月）

外部より内部の装飾　棚橋絢子
良妻賢母と人格　宮田脩
婦人と高等教育　島村抱月
涼台雑話　弥生女
天照アテイナ女神　木村鷹太郎
婦女の過去と未来　岡村司
涼味　佐々醒雪
七八歳の子供を持てる家庭　美鳥
太魯閣蕃の婦人美　森丑之助

家庭

茶の湯独習　星野宗悦
趣味ある廃物利用法　長崎発生
九月の総菜料理

文芸

新訳栄華物語　与謝野晶子
光耀　よさのひろし訳
幼きころ　尾島菊子
渚より都へ　湖風生
「花月痕」梗概　沢村ゆきを
通事呉鳳　高畠旭仙
短歌選抄　土屋榛南
歌反古の中より　西川芳子
女流俳句評釈　菜の里人
島の悲劇　重松淑子
初夏の歌　竹下梅子
講談　山鹿素行　雲井芙蓉
附録　太魯閣蕃討伐記

第七十一巻（大正三年十月）

婦人と仕舞　山階明子
食物の変遷と人類の滅亡　佐伯矩
欧州に於ける家婢の境遇　淵泉漁郎
歌壇の近況を報ずる書　失名氏
流行歌の波及する所　つね子
吾が見たる女性　萩花
評判　松岡曙村
呉織、穴織の旧蹟　斗南生
頼山陽が妻梨影女史　平野うた子

家庭

華道秘訣　安田梅裀
十月のお惣菜　星野宗悦
茶の湯独習

小説

新訳栄華物語　与謝野晶子
夏の静けさ　よさのひろし訳
紅白の薔薇　押川春浪
鳳求堂物語　今関天彭

女流秋の句　内藤鳴雪
短歌選抄　土屋生
泣声　西川よし子
山棕櫚の鞭　英塘翠
講談落語　雲井芙蓉
山鹿素行　痛心亭かほる
子育て
附録　太魯閣蕃討伐記

第七十二巻（大正三年十一月）

戦時の婦人　安井哲子　鳩山春子
日向きむ子
女子の活動　芳賀矢一
交戦国の女　青柳有美
時変と婦人の覚悟　山脇房子
我が婦人の奉公　一記者
軍国小話
掃海作業に海女　舟橋清信
婦人と後援　在京記者
軍国の婦人　湖風生
御殿騒動の塞耳維　杜の人
青島市の風俗　南斗星
秋の日本は世界的公園　伊藤篤太郎
日日草　長谷川時雨
茶の湯独習　星野宗悦
華道秘訣　安田梅裀
十一月のお惣菜
観菊料理　信子
戦争の影響を受けた品物　一記者
文芸
昼餐　与謝野晶子
哀歌　よさのひろし
オルレアンの少女　土屋榛南
ひとみのいろ　うつせみ
大軍来　花筐山人訳
短歌選抄　土屋生
女流俳句評釈　菜の里人
山鹿素行　雲井芙蓉
附録　戦の国の女　風来山人

第七十三巻（大正三年十二月）

婦人と戦後の覚悟　横井時敬　寺田勇吉
現代よりも将来の計　矢島楫子
戦争に現はれたる東西思想の相違　伊豆凡夫
勇気ある泰西婦人　石川半山
家庭の人に　芦田均
母のために　武内貞義
上野公園の秋　三宅克己

家庭音楽としての箏曲楽　鈴木鼓村
留学時代回顧
音楽の都維也納の思ひ出　幸田延子
巴里の音楽学生　神戸絢子
英国留学の思ひ出　小此木松子
独逸の学生生活　石川千代松
北白川宮故能久親王殿下の御最後　高野盛三郎
羅馬尼王妃カアメン・シルワ　一記者
卓子小話　在京記者
日日草　長谷川時雨
茶の湯独習　星野宗悦
最近流行半襟の趣味
文芸
妻の死（小説）　与謝野寛
我の思へる（歌）　与謝野晶子
幼きころ（小説）　尾島菊子
近作の中より（歌）　関鉄腕
尊き腕輪（小品）　四郎訳
歌壇一夕話　失名氏
短歌選抄　土屋生
竹囲詞壇詠草
極楽島物語（お伽噺）　英塘翠
諸国伝説
質屋庫（落語）　三遊亭有楽
金責（落語）　痛心亭かほる
附録　戦の国の女　風来山人

注

（1）拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の性格―プロパガンダ、そして近代文学発生の場として―」（『県立広島大学人間文化学部紀要』第5号、平22・2）。なお、台湾総督府と愛国婦人会台湾支部との親密な関係については、竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史　明治篇』（田畑書店、平7・12）、洪郁如『近代台湾女性史　日本の植民統治と「新女性」の誕生』（勁草書房、平13・11）等に詳しい言及がある。

（2）台湾総督府官房統計課『台湾総督府第十三統計書～第二十統計書』（明44・2～大6・1）参照。

（3）『中心から周縁へ―作品・作家への視覚』（梧桐書院、平20・8）

（4）拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』目録―大正四年一月から大正五年三月（廃刊）まで―」（『広島女子大国文』第22号、平19・12）、「雑誌『台湾愛国婦人』の史的位置―新資料・第六十巻を中心に―」（『日本研究』第22号、平21・5）

［付記］貴重な資料の閲覧をご許可下さった函館市中央図書館に感謝申し上げます。

（しもおか　ゆか、県立広島大学准教授）